

経営学（4/24） ※出席票は9時までは配布します！

◎経営学は実践的な学問

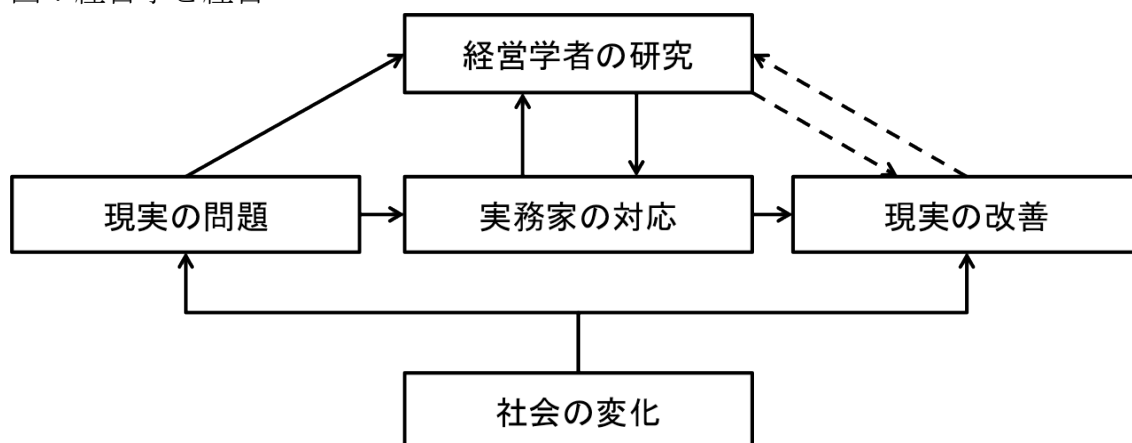
◎経営学の歴史

「経営学はこれまで、どんな課題に取り組み何を明らかにしてきたのか。」

◎アメリカ経営学を中心に概説

- ・代表的な経営成果を辿ることで開設
- ・主な経営学者とその研究成果
- ・経営学の問題意識の変化
- ・現在の経営学
- ・これから経営学を学ぶにあたって

図：経営学と経営



1-1 現場からの出発

◎工業生産の効率性向上

◎テイラー『科学的管理法』（1911）

- ・それまでの技師達の議論を体系化
 - * 動作研究
 - * 標準作業量
 - * 差別出来高給制度
 - * 職能別組織 ※大きな作業を小さい作業に分けて、専門化させればいい。

◎ファヨール『産業ならびに一般の管理』（1916）

- ・管理を他の活動から分離
- ・管理を5つの要素（計画、組織、命令、調整、統制）に分解
- ・管理原則を提示

1-2 現場からの出発

◎ホーソン実験で人間関係論

- ・「どのような状況で作業を行うと生産性が上がるか」
- ・実際の工場で「実験」

◎メイヨー『産業文明における人間問題』（1933）

◎レスリスバーガー『経営と勤労意欲』（1941）

- ・物理的な労働条件は影響が少ない
- ・非公式な組織、人間関係の重要性

2-1 理論化の進展

◎近代組織論の誕生

◎企業全体を対象にした研究

- ・バーナード『経営者の役割』（1938）
 - * 「組織」の発見
 - * 「公式組織」の成立要件
 - * 「公式組織」の存続要件
 - * 「公式組織」を成立させ、存続させることが「経営者の役割」

2-2 理論化の進展（2）

◎近代組織論の深化、精緻化

- ・サイモン『経営行動』（1945,1957）
- ・サイモン、マーチ『オーガニゼーションズ』（1958）
- ・サイアート、マーチ『企業の行動理論』（1963）
 - * 「経済人」に対する「経営人」
 - 限定的合理性を持つ存在としてのヒト
 - * 企業、組織を、構成するヒトの活動に分解
 - * 意思決定への注目
 - * ヒトの意思決定を組み合わせることで企業、組織を理解、記述（モデル化）
 - * 他の社会科学との連携（心理学、社会学など）

2-3 理論化の進展（3）

- ・「どのような状況でも同じ組織」への疑問
- ・コンティンジェンシー理論（フィードラーが提唱）、マクロ組織論
- ・ウッドワード『新しい企業組織』（1958）
- ・ローレンス、ローシュ『組織と環境』（1967）
- ・バーンズ、スターカー『イノベーションのマネジメント』（1961）

* 「組織を取り巻く状況（環境）に応じて、良い組織は異なるのでは？」

* ある規模の組織を一体とみなし、類型化

→ 有機的組織と機械的組織

* 環境に応じた分化と統合

※ 直面している環境に応じて、サブユニットに分化しなければならない。

※ それらを管理しなければならない。

3-1 巨大企業への提言（1）

◎ 巨大企業の経営はどのようになるのか

・ アメリカにおける「ビッグビジネス」の成立と成功

・ チャンドラー『経営戦略と組織』（1962）

・ アンソフ『企業戦略論』（1956）

* 歴史的な事例研究に基づく、「組織は戦略に従う」

* 企業の方向性に関する計画の必要性

* 「シナジー効果」、「競争優位性」、「能力プロフィール」等に基づいて立案

※ 事業部制の導入がおこる。

3-2 巨大企業への提言（2）

・ 企業経営と戦略についての更なる研究

・ コンサルティング企業、大学による企業の分析と「診断」

・ 企業の戦略、経営資源の活用法に関する実践的な分析ツールの提供

* 経験曲線効果（BCG）

累積生産量と共に、コストが低下する現象

* PIMS : Profit Impact of Market Strategy (Harvard Univ.)

市場シェアが企業収益に与える影響

* PPM : Product Portfolio Management (BCG, GE・McKinsey)

市場シェアと市場成長率から事業の将来性を判断

3-3 巨大企業への提言（3）

・ ルメルト『多角化戦略と経済効果』（1974）

* 多角化の有効性の実証研究

・ ポーター『競争の戦略』（1980）

* 企業の一部である事業ごとの戦略（事業戦略、競争戦略）

※ ポーター以前は全社戦略（コーポレート・ストラテジー）が対象であったが、これ以後は事業ごとの戦略へとシフトしていく。今日では競争戦略の研究が中心である。

・経済学（産業組織論）の応用成果

＊「戦略論」に確立

※経済学…完全市場における均衡を目指し、利益ゼロを是とする。

→これを逆手に取って、経済学で得た知見を経営学に転用

4-1 「日本」の台頭

◎1970年代から日本企業が急成長

・特に、自動車産業、電気機械産業などの企業

・「日本企業は、なぜ優れているのか？」

◎1980年代から、日本企業に刺激された研究

・国際的な比較研究

・それまで以上に、一般性の高い企業、組織に関する知見の積み重ね

＊アメリカに加え、日本の経営学者による研究

4-2 日本初の経営学

<日本を代表する経営学者>

(第一世代?)

- ・野中郁次郎 組織論（知識創造、情報創造）
- ・今井賢一 組織論（組織の経済学、ネットワーク組織）
- ・土屋守章 組織論、戦略論
- ・伊丹敬之 戦略論、組織論（日本企業、人本主義、「場」）
- ・加護野忠男 組織論、戦略論（日本的経営）
- ・鈴木良隆 経営史（比較経営史）
- ・米倉誠一郎 経営史（鉄鋼産業）、ベンチャー企業論
- ・橘川武郎 経営史（日本経営史）
- ・吉原英樹 国際経営論
- ・奥村昭博 戦略論

(第二世代?)

- ・榊原清則 戦略論、組織論（技術マネジメント、イノベーション・マネジメント）
- ・竹内弘高 戦略論、組織論（知識創造）
- ・石井淳蔵 マーケティング
- ・片平秀貴 マーケティング（マーケティング・サイエンス、ブランド論）
- ・金井壽宏 組織論、人的資源管理論
- ・國領二郎 戦略論（技術マネジメント；IT産業）
- ・高橋伸夫 組織論、意思決定論、ミクロ組織論

- ・藤本隆宏 戦略論、組織論（技術マネジメント、新製品開発研究；自動車産業）
 - ・武石彰 戦略論、組織論（技術マネジメント；自動車産業、コンテンツ産業）
 - ・延岡健太郎 戦略論、組織論（技術マネジメント、新製品開発研究；自動車産業）
 - ・沼上幹 組織論、戦略論
 - ・新宅純二郎 戦略論（技術戦略；電子機械産業）
 - ・浅羽茂 戦略論（経済学との接合）
 - ・網倉久永 組織論
- など

5-1 現代の経営学

- ◎いままで中心だったアメリカ経済学の相対化
 - *日本の経営学独自の発展
 - *ヨーロッパ、韓国、台湾、中国などの企業の成長
- ◎技術革新（IT技術）、環境問題などの諸課題への対応
 - *イノベーション、製品開発のマネジメント
 - *組織について再検討

5-2 現代の経営学の考え方

- ◎組織、環境、戦略の相互作用
 - ・「戦略によって（市場）環境を特定し、それに合致した組織を構築（デザイン）する」
 - ・「戦略によって環境を特定し、環境に合致した組織を構築（デザイン）すると、その組織に戦略が影響を受ける」
- = 「組織は、環境に合致した戦略を遂行するだけの存在ではない」

